

柑橘園の除草剤利用に関する研究 カラムシに対する殺草試験

佐 藤 二 郎
(大分県柑橘試験場 津久見分場)

SATO, J.

Studies on the Herbicides Application in Citrus Orchards
Weed Control Test to Karamushi (*Boehmeria nipponoivea* KOIDZ.)

各種除草剤の開発によって、一年生雑草の除草は容易になった。しかし従来の除草剤に強い宿根草が繁茂し、その除草に苦勞するようになった。とりわけカラムシはイラクサ科に属し、一名ノマオともいわれ、木本植物であり、地下茎で繁殖する。草丈は1.5m まで伸び、再生も早い。

津久見地方は急傾斜で階段畑がせまく、石づみの園が多い。この石の間からカラムシが大発生し、その除草には多くの労力を費やし、さらにミカンの品質の低下を促している。農家は古くから薬剤除草を考え、秋期刈草して、硫酸銅の10倍液を処理したこともあったが、充分の効果をあげていなかった。

1973年からカラムシに対する除草剤試験にとりくみ、各種の薬剤試験の結果、階段畑ならびに石垣面の除草には、アシュラムが有効であり、実用化しうることがわかったのでここにその結果を報告する。

1. 試験方法

薬剤試験にあたっては、移行性が強い薬剤であること、また石垣面に処理するため液剤か水和剤であること、ミカン樹に接触害、土壌処理害の軽いものであることを条件として選んだ。

アシュラムの使用量は既往の試験結果で、10a 当たり 3ℓ、水量 200ℓ の計算から70倍に稀釈し展着剤を加えた。処理時期は、カラムシの草丈50cm内外をえらんだ。散布量は各葉によくかかる程度に散布した。

2. 試験結果と考察

散布後3日目位で、各生長点がい縮状になり伸長を停

止する。つづいてえき芽が出はじめる。20日目頃より葉がかつ変しはじめ落葉する。えき芽は奇形葉となり伸長は微少である。50~60日で茎とともに枯死する。翌年の発生の状態を観察した結果ほとんど発生はないが、点々とみる場合もあったが、これは薬剤の附着量と地下茎の量によるものと考えられる。2回目の処理で全滅し得るものと思される。

3. 柑橘樹に対する薬害試験結果

柑橘樹への薬害試験の結果、接触害については、葉に附着すると黄化し、激しい場合は落葉する。カラムシは発芽して50cm内外に伸長する時期は5月上旬でありミカン春しようの展葉期である。緑化の完成してない葉はその黄化がはなはだしい。また温州ミカンより川野夏橙は接触害がひどくあらわれた。

土壌処理試験はポット植の川野夏橙で実施したが薬害の徴候は認められなかった。

第1表 除草剤によるカラムシ殺草試験

薬 剤 名	処 理 前 数 本	処 理 後 数 本	翌 年 の 発 生 数
アシュラム A区	283	0	0
アシュラム B区	110	0	0
DBN 粒剤 A区	186	0	71
DBN 粒剤 B区	30	0	43

注) アシュラムは10a 当薬量 3ℓ、水量 200ℓ、茎葉処理、DBN 粒剤は10a 当薬量 20kg、水量 200ℓ、刈取後土壌処理(前年度の試験結果による)